戸田　教敞　学位（博士）請求論文審査報告書
論文題目：近現代日蓮主義の研究

本論文は、近現代における日蓮主義の諸相を明らかにし、日蓮教団史研究の視点から、「日蓮主義とは何か」という問いを明らかにすることを目的としたものである。

これまでの日蓮主義に関する研究については、戦後の批判的研究からはじまった。日蓮主義を国家主義的な右翼思想であると断罪的に論じる研究が１９９０年代にいたるまで継続していたが、その後の近代仏教史研究の進展にともなって、２０００年代以降は日蓮主義を標榜して日蓮門下のみならず、日本社会に大きく影響を及ぼした田中智学を中心とする研究が盛んにおこなわれている。特に宗教学・社会学・思想史学研究などからのアプローチが主流で、残念ながら日蓮教団史研究からの考察は十分であるとは言い難い。

こうした現状を踏まえて、論者の戸田氏は明治・大正・昭和前期という激動の時代に掲げられた「日蓮主義」とは如何なる思想であったか、また現代に生きる人々が「日蓮主義」をどのように受け止めるべきなのか、という問題意識をもって本論文の執筆にいたったと言う。

論者は本論文において、まず日蓮主義の創唱者である田中智学（１８６１～１９３９）の日蓮主義について検討している。智学はこれまでの日蓮主義研究において、最も多く言及されてきた人物であり､その事跡や思想についてさまざまな面から検討されている。これまでの先行研究を詳細に参照しながら、ほとんど検討されてこなかった日蓮教学的な課題にも目を向け、「田中智学の日蓮主義とは如何なる思想態度であったか」、「田中智学が日蓮主義という言葉にどのような意義をこめたのか｣について考察されている。

続いて、明治後期から昭和４０年代までジャーナリスト・政治家・教育者として活躍した石橋湛山（１８８４～１９７３）について着目している。これまでの湛山についての研究は、外交論・経済論から自由主義や平和思想といった思想面まで、非常に多くの蓄積がある。しかしながら湛山の出自である日蓮宗との関連、特に思想面でのつながりについては、詳しい検討がなされてこなかった。さらに日蓮主義研究の中で、湛山が扱われることはほとんどなかった。しかし湛山の言説や思想には智学に通じる点があり、その検討を通じて、智学のものとは異なる日蓮主義の一面が湛山にあるという着想にいたったと言う。湛山は自身の思想を「日蓮主義」と呼ぶこともなく、「日蓮主義者」を自称することもなかったが、日蓮の行動や思想を自身の指針とし、特に立正大学長時代には「祖師へ帰れ」との言説も遺している。そのような「湛山の思想を日蓮主義と呼ぶべきか」という問題を掲げながら、「日蓮主義とは何か」という問いと直結させ、湛山が日蓮を如何に受容したのかを検討している。

本論文は序章、本論十章、終章から構成されている。

序章では、「田中智学研究史」と「石橋湛山研究史」をそれぞれ概観し、課題の確認をおこなっている。

第一章「田中智学の生涯」では、活動の変遷等を踏まえ、智学の生涯を「出生から還

俗まで（思想形成期）」、在家仏教を提唱しつつ宗門諫暁活動をおこなった「蓮華会結成から立正安国会初期（在家仏教形成期）」、宗門外からの論争をきっかけとして宗門改革に一層力を入れる「立正安国会中期（宗門改革期）」、日清日露戦争を経て日本国体学が形成される「立正安国会後期（国体学形成期）」、智学の門下団体が統合され活動の最盛期を迎える「国柱会前期（活動統合期）」、明治節制定等の諸活動を通じて国体宣揚が最も高まりをみせる「国柱会中期（国体宣揚期）」、会務を離れ文筆と芸術伝道に力を注いだ晩年「国柱会後期（活動大成期）」の七期に区分して概観している。

第二章「田中智学の在家仏教について」では、在家仏教の側面に着目して検討が進められている。第一節「還俗の経緯と要因」では、還俗までの経緯とその要因について、第二節「智学の在家仏教論」では『仏教夫婦論』と「仏教僧侶肉妻論」を中心に、それぞれ確認している。また、第三節「その他の著述における在家仏教論」では、それ以外の著述を資料にして智学の在家仏教論を検討し、在家仏教のもつ社会志向性が日蓮主義へと展開したことを指摘している。さらに補論「国柱会における田中家家族の役割―家族教化の一例として―」では、桐谷征一氏が所蔵する資料を紹介し、智学が提示した家族教化の事例として田中家家族の活動等を確認している。

第三章「田中智学の宗学理解について」では、智学の宗学的立場を明らかにするための諸課題を検討している。第一節「『妙宗式目講義録』にみる智学の学的態度」では、智学の基本的宗学態度を、第二節「智学の本尊観―佐渡始顕本尊中心観について―」では、思想の中核となる本尊観を、第三節「智学の日蓮教団史研究」では智学の教団史受容を、第四節「智学の日蓮教学史受容と先師への評価」では、智学の先師に対する評価について、それぞれ確認している。

第四章「田中智学の国体論について」では、智学の国体論について検討している。第一節「智学の神道観」では、国体論を検討するための前提となる智学の神道観を、第二節「天照太神の位置づけ」では、宗学と国体論の最も重要な接点として天照太神の位置づけに着目して智学の国体論の内容を、第三節「法華神道との関係」では、国体論と法華神道の共通点と相違点をそれぞれ確認し、智学の国体論に法華神道からの影響がみられることを指摘している。

第五章「田中智学の日蓮主義」では、前章までの内容をもとに「智学の日蓮主義」について検討している。第一節「「日蓮主義」の成語化」では、先行研究をもとに「日蓮主義」の造語の経緯を確認し、第二節「智学の日蓮主義」では、先行研究における「智学の日蓮主義の特徴」についての指摘に対し批判的検討がくわえられ、智学が「日蓮主義」にこめた意味を再考している。

第六章「近代日蓮宗と日蓮主義」ではこれまでの視点を変え、近代日蓮宗において智学の日蓮主義がどのように受容されたかを検討している。第一節「優陀那院日輝の学的態度」では、近代日蓮宗の思想的基盤となった優陀那院日輝の宗学態度を、第二節「智学の日輝批判」では第一節を前提にして智学による日輝批判の具体的内容を、第三節「日蓮宗と智学―還俗以後の活動を中心に―」では、智学の還俗から明治中期頃までを中心に、智学と日蓮宗の関係を、第四節「明治後期以降にみられる日蓮宗と智学の関係改善

について」では、明治後期以降の両者の関係性について、それぞれ確認している。

続く第七章から第十章は石橋湛山についての検討がなされている。

第七章「石橋湛山と日蓮宗」では、湛山を教団史研究の視点から捉えるための導入として、湛山と日蓮宗の接点について検討している。第一節「湛山の生涯」では湛山の生涯を概観し、第二節「湛山にみる近代仏教の特質」では、湛山にみられる「在家仏教」と「日蓮主義」という近代仏教の二つの特質について、第三節「湛山と日蓮主義者の交流―「山川智応書簡」を資料として―」では、国立国会図書館憲政資料室蔵「石橋湛山関係文書」中、「山川智応書簡」の内容を紹介しつつ、智学の高弟である山川智応と湛山の交流について、それぞれ確認している。

第八章「石橋湛山思想の淵源」では、第一節「父・杉田日布」、第二節「師・望月日謙」、第三節「大島正健とクラーク流教育」、第四節「田中王堂とプラグマティズム」の四節を通じ､湛山の思想形成に影響を与えた四人の人物について検討をくわえている。

第九章「石橋湛山における日蓮遺文の引用について」では、湛山の言論における日蓮遺文の引用に着目し、湛山の日蓮受容を具体的に検討している。第一節「湛山の日蓮観に関する先行研究」では、湛山の日蓮観に関する先行研究を指摘している。第二節「中学校時代」、第三節「明治から大正期」、第四節「昭和戦前から戦中期」、第五節「昭和戦後期」、第六節「立正大学長時代」では、各時代における湛山の言論の中から日蓮遺文が引用される文章を網羅的に検討し、時代ごとの特徴を確認している。

第十章「石橋湛山の日蓮主義」では、前章までの内容をもとに、「湛山の日蓮主義」について検討している。第一節「湛山の自由主義」では湛山の自由主義思想について、また第二節「湛山の宗教観」では自由主義に基づく湛山の宗教観について、それぞれ確認している。そして第三節「湛山の日蓮観」では湛山の自由主義的日蓮観について、その内容をまとめている。

最後に、終章「日蓮主義とは何か」において、各章のまとめをおこないながら、近現代の「日蓮主義」に通底する三つの要素を提示している。一つ目は、自身の思想や行動の根拠を日蓮に置くという態度。二つ目は、日蓮の思想や行動原理を以て社会に活かそうという「社会志向性」。三つ目は、日蓮遺文を直接読むことができるようになった点や、また仏教が寺院の外に開かれる状況が整ったという意味で、近代以降の動向であると指摘している。これらの点こそ、所謂「法華信仰」「日蓮信仰」「祖師信仰」と「日蓮主義」とを見分ける要件であり、これらの要件を「日蓮主義」の大枠と捉え、今後は個別の「日蓮主義」について事例研究を進めたいと結んでいる。

以上、本論文は近現代における日蓮主義を日蓮教団史の視点から考察し、「日蓮主義とは何か」という問題を解明するために、「日蓮主義」という言葉を創唱して日蓮門下内外に影響を及ぼした田中智学と、これまで日蓮主義とは無縁の立場に存在していたと思われていた石橋湛山の行動と思想を詳細に分析した。そして「日蓮主義」について、それぞれの思想や行動の根拠を日蓮に求める態度であり、日蓮の教えを社会の中に活かそうという社会志向性を有する、近代以降にみられる日蓮受容のあり方であるという結論にいたったものである。

本論文では、従来の研究では明らかにされていなかった、田中智学の「在家仏教論」「宗学理解」「国体論」といった教学思想を解明し、また石橋湛山の自由主義的な日蓮観を在家仏教と日蓮主義という視点から明らかにした。さらに近代日蓮教団史研究の側面から智学と湛山を捉える必要性があることをなげかけ、くわえて田中智学の国家的日蓮主義と石橋湛山の自由主義的日蓮観を深く掘り下げて理解することによって、「日蓮主義」に対する新しい定義を示したものである。一方で田中智学と石橋湛山に対する考察について並列的に述べられている点や、両者を日蓮主義に位置づけることで得られた指標も、やや外面的・形式的であることは否めない。また、使用されている基礎資料について、それぞれの全集を大いに用いているが、全集の場合は原資料と異なる場合があることから、さまざまな側面からその正当性・妥当性の検討を求める必要があることは確かだ。但し、これらの問題点を有しながらも、本論文は今後の日蓮主義研究の分野に一石を投じるものとして高く評価でき、今後のさらなる学問研鑽に期待するものである。

なお、本論文の審査に際しては、立正大学文学研究科の内規により、令和５年２月１０日に公聴口頭試問をおこない、論者の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと審査委員会は判断し、これを認定する。

令和５年２月１６日

主査　立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授　安中 尚史

副査　立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授　寺尾 英智

副査　立正大学大学院文学研究科哲学専攻
教授　板橋 勇仁

副査　佛教大学大学院社会学研究科社会学専攻
教授　大谷 栄一